

紀要第一号を刊行するにあたって

日本における歴史地理学は第二の発達段階にいたつているといわれている。もはや「歴史地理学とは何ぞや」ということが中心テーマとなる啓蒙時代はすでにすぎさつたといつてよい。歴史地理学の発達は、地理学全体にまで好ましい効果をおよぼすまでに成長している。アメリカのD・ホイットルセイは、一九四五年に“The horizon of Geography”の中で、「地理学の水平線はたえず拡大されて、理論的には、第四次元として時間を包含する方向にすすんでいる」と雄大な人類の空間概念の拡大を論じている。彼はこの四次元を同時に理解せしめる方法と実証を示していないことは残念である。歴史地理学は「もう一つの別な地理学」として広大な領域を発見されてから、その内容を充実させながら、「最近の地理学の方法に対する抗議」までするようになった。合衆国のH・F・ラウブに批判させると、「最近の方法は主なる地域の事象が現在の条件とどのような関係にあるかという分析にだけ限られていて、それらの発展の上に決定的重要性をもつ時期において働いていたファクターを考えないような方法」と述べて、その静態的態度に反省をのぞんでいる。

この二人の歴史地理学にいだいている期待はまことに大きい。しかしこの日本歴史地理学研究会の目的は、ここにおかれていない。第一の発達段階に、歴史地理学が日本に発達する地盤と方向を確定することができた。われわれはこの先学の偉大な功績を仰ぎながら、もう一歩すすんだ段階におしあげようとするのである。それは歴史地理学の全理論体系のうち立てることと、おもな時間的断面における実証的研究の総合である。日本における歴史地理学の理論は、大別して三つのタイプがある。(一)は歴史の地理的解釈、(二)は過去の時間的断面における地域の復原、(三)は現在

における地理的事実のうちで過去に生起したものの説明である。われわれの研究会において、これらの方法論の一つに統一しようとする愚は考えていない。この三つのタイプは従来は異質性のみ強調されてきたのではないだろうか。むしろ対立する領域ではなく、有機的な関連性を持つている領域ではないだろうか。歴史地理学の全理論体系を構想すれば、(一)が基底によこたわり、(二)が中間に位置し、(三)が上層となる三層構造をなしているものではないだろうか。この歴史地理学理論の三層構造はあくまでも未熟な私見であるが、この研究はこの三つのタイプを相互援助の下で発展させることにある。これらいずれの立場をとっても、さまざまの時間的断面における多くの地理的事実を明らかにして、これを総合しなければならぬ。そのためには、歴史地理学の研究者が個々ばらばらでなく、手をとりあつて前進できる体制が前提となるだろう。

日本歴史地理学研究会の紀要第一号は、この目的に向つての第一歩である。第一歩は研究会の発足する起点を明らかにするために、歴史地理学理論を中心として編集することになった。これは三部門からなつてゐる。一、日本における歴史地理学の發達、二、世界における歴史地理学の現状、三、歴史地理学の現在の問題点である。これらのテーマについて、この紀要をもつて、編集委員会は満足してゐるわけではない。なおとりあげるべき事項が、三部門のどれにおいても、残された部分がむしろ多いことを自覚してゐる。これはさらにつづけて、今後の完成をまつことにしたい。紀要第一号は、会員諸兄の絶大な御援助と御投稿によつてまともあげることができた。編集委員会は、多忙の中に時間をさいて出版にまで漕ぎつけたことは、何人も感謝せざるをえない。日本歴史地理学研究会がこの紀要を年々と重ねていくためには、会員諸兄の一層の御支援と御鞭達を仰がなければならぬ。

一九五九年三月二一日春分の日